

Intelligent Café の活動を通じた学び

— グローバルリーダーとしての能力 —

A New Learning operating Intelligent Café

— Ability to become a Global Leader —

SULE 委員会

岩藤 英司 久野あゆ美 小太刀知佐 坂井 英夫 塚越健一郎 齋藤 洋輔
永尾 瑠衣 宮城 政昭 若宮 知佐 池尻 良平¹

<要旨>

本校は、平成 24 年度よりスーパーサイエンスハイスクール事業の取り組みの一環として、自由な学びの場としての Intelligent Café の運営に取り組んでいる。1 年目～3 年目の In-café での取り組みについては、本校研究紀要第 50 集～第 52 集において、「Intelligent Café の運営とコーディネーションの育成」¹⁾、「Intelligent Café における新しい学びの取り組み(1), (2)」²⁾ で報告している。4 年目の本年は、Intelligent Café の活動の中で、生徒が自主的な取り組みを通して何を学び、今後期待されるグローバルリーダーとしての能力の醸成に貢献できたかを報告する。

<キーワード> Intelligent Café (In-café) コーディネーション能力 コミュニケーション能力
キー・コンピテンシー グローバルカフェ 人とのつながり 東北スタディツアー
東北ボランティア SGH アソシエイト

1 はじめに

本校の Intelligent Café (以下 In-café) は、平成 24 年度に指定されたスーパーサイエンスハイスクール事業 (以下 SSH) の取り組みの一環として、「自由な学びの場」という位置付けで運営をしている。SSH の取り組みの中で、本校は理系に特化した人材の育成を目指すだけでなく、グローバル化した社会の中でも活躍できる真のリーダーの育成を目指している。また、平成 26 年度からスーパーグローバルハイスクール事業 (以下 SGH) にも応募し、現在アソシエイト校 (A) として活動している。

In-café とは、「自由な学びの場の創造」、「人とつながる場の提供」という理念の元に、生徒たちの自由な学びや、やりたいことを実現できる空間である。この空間で、生徒たちの自主的な活動をサポートしながら、活動のきっかけとなる「種をつくれる」ような、総合的コミュニケーション能力やコーディネーション能力の育成や、「人とつながる場」という機能を通して、活動の幅を広げる人的なネットワークの醸成を目指している。そして、これらの活動による学びが、グローバル化した社会の中で活躍できる真のリーダーに必要な能力の育成に繋がるものとして検討した。

なお、高度な科学・技術を基盤とする国際社会で活躍する人材に必要なキー・コンピテンシーとして、SSH

の事業では、以下の 3 つの能力の育成を目標としている。

- ・高度科学・技術社会の課題を発見する力
- ・科学的プロセスを踏んで問題解決する力
- ・グローバルに発信する表現力と語学力

これらの能力は、文科省の『OECD における「キー・コンピテンシー」について』³⁾ を踏まえている。

また、SGH - A 事業では、必要なキー・コンピテンシーとして、同様に以下の能力の育成を目標としている。

- ・バランス良く世界を眺める力
- ・英語でディスカッションする力
- ・利害の対立を御して合意形成する力

In-café は、「自由な学びの場の創造」、「人とつながる場の提供」という理念の元に、理系文系に限らず、生徒たちの自由な学びや、やりたいことを実現できる空間である。まさに、自分で課題を見つけ、協働してそれを解決して行くという総合的コミュニケーション能力やコーディネーション能力の発揮の場である。

In-café の活動を通して、SSH や SGH-A で育成するキー・コンピテンシーをどのように伸ばすことができるか、生徒自ら課題を発見し、それをどのように解決したか。また、それをどのような表現力を持って発信したか検証することとした。

¹東京大学大学院情報学環

2 今年度の In-café の活動

2-1-1 In-café の取り組みと目標

In-café の活動は、グローバル化した社会の中でも活躍できる真のリーダーの育成を目指している。

そのため必要とされる能力として、総合的なコミュニケーション能力としてのコーディネーション能力育成や、生徒たちの自由な学びややりたいことを実現する能力の育成について、課題を設定し変容を捉えることを試みた。具体的には、「生徒や教員、専門家たちが In-café に集い、自由に議論できる空間の創造する」という本来の理念から、In-café スタッフの課題には、以下の5項目を設定した。

- ① 生徒たちが自由な学び場を作ることができる。
- ② 生徒のやりたいことを実現することができる。
- ③ 生徒や教員、専門家が自由に議論できる空間をつくることができる。
- ④ In-café の活動を生徒や教員に PR することができる。
- ⑤ 自ら課題を見つけ、それを解決できる。

また、一般生徒には、In-café のイベントを通して、自ら課題を発見したり、考えたり感じたりしたことを自由な表現方法で発信する場として、In-café を活用することを目指したり、また、タイ語、韓国語の講座や心理科学講座、グローバルカフェなどの活動を通して、様々な視点から意欲的に議論し、グローバルに発信する表現力と語学力を身に付けたりすることを目標とし、以下の5項目を課題とした。

- ① イベントに自主的に参加することができる。
- ② イベントでの学びを記録することができる。
- ③ イベントでの学びから新たな課題を発見できる。
- ④ 課題を解決するための行動を起こすことができる。
- ⑤ 自分の考えを様々な方法で発信することができる。

2-1-2 具体的な事業内容

In-café の担当者が4月に立てた事業内容は、In-café 運営講座、心理科学講座、Que-que、東北スタディ、10 min.talk などの実践であった。昨年度の引き継ぎから、課題として、In-café スタッフがやりたいことをやれるように、イベントをまわすシステムや教員側の柔軟なバックアップ体制の再整備が上げられた。In-café の年間活動計画を表1に示す。

表1 In-café の年間活動計画

4月	In-café 運営講座 キャリアの科学 心理科学講座 『ココロ』ってなんだろう 随時：10min,talk
5月	心理科学講座 人づきあいのアレコレ In-café 運営講座 (学習の転移の科学) 「地学って普段の生活にどう役立つの」
6月	心理科学講座 「やる気の心理学」 In-café 運営講座 「附高の先生の頭の中 (化学編)」
7月	夏の学校説明会 (インカフェ)
8月	2学期の活動の準備
9月	心理科学講座 「ゆっくり座談会」 In-café 運営講座 「附高の先生の頭の中 (国語編)」
10月	心理科学講座 「コミュニケーション」 In-café 運営講座 「良いプロジェクトの回し方」
11月	心理科学講座 「コミュ障」って、なに？ In-café 講座 「附高の先生の頭の中 (歴史編)」
12月	東京都発表会参加
1月	In-café 運営講座 心理科学講座 「アサーショントレーニングをやってみよう」
2月	In-café 運営講座、心理科学講座
3月	SSH 校内発表会、SSH 関東発表会

(文責 宮城)

2-2 生徒の取り組み

In-café スタッフが活動を行っていく中で志していたものは、「人が集まる空間」の設計というものであった。人が集まれば自然に会話が生まれ、会話が生まれれば新しい発見や学びが生まれる。この循環を大切にしたいという理念のもと、生徒たちは活動している。その達成のために、ふらっと立ち寄り、訪れるだけで学びが得られるような場所にしていこうと奮闘してきた。ここでは、その取り組みと課題を紹介していきたい。

2-2-1 空間設計

「人が集まる空間」にするためにまずは、In-café を過ごしやすい空間にすることが必要であった。そのためにはイベントができるという条件とともに過ごしやすい空間を作ることを考え、まず In-café のものの配置を変更した。入って左側に書籍・文具類をまとめ、場所をわかりやすくするとともに、そこをホワイトボードで仕切り勉強部屋のように落ち着く空間にした(図1)。



図1 落ち着く空間設計の例



図2 イベントに応じて変化した後の様子

一方で、スペースを最大限にいかすためほかの空間はイベント用に開放し、用途に合わせて自由に机・椅子を動かせるようにした(図2)。

それに加え、In-caféに来るだけで何かを得られるようにするために掲示物に気を配った。スタッフの自己紹介専用のホワイトボードを作成、その他にも science ボードや information ボードも作成した。また、フリーペーパーを設置し自由に閲覧できるようにした。

このように、スタッフは空間の配慮で、来やすい空間への改善を図ったのだが、イベントの際に、前後の入り口の間に電子黒板を置き、講師の先生や発表者は、たいいてい電子黒板の前で講義をしていることに対して、1年生から、講義を受けている人が皆入り口に目を向けているため、かえって入りにくい雰囲気をつくっているのではないかと、との声も寄せられ、改善を考えている。そのことで集客に繋げることができるかを検証中である。

2-2-2 イベント

イベントは現在大きく分けて3種類ある。教員の持ち込み企画、定期的に行っているイベント、生徒が企画、運営を行う生徒の持ち込み企画である。

教員の持ち込み企画は、タイ語や韓国語等の語学講座やちょっと変わった進路講演会などがあり、定期的に行っている継続イベントとしては Que-que であったり心理学講座であったり教員の伝手で外部の方をお招きして生徒が定期的に行っているものがある。

今年度は、生徒の持ち込み企画を増やすことにより In-café の敷居を低くしようと試みた。In-café のイベントに参加したことがない人は、外部の人がいるだけで敬遠してしまう傾向がある。それを少なくし敷居を低くすると同時に生徒によるイベントを行うことで、身近に In-café を感じてもらおうとした。

4月の主な対象は入学したばかりの1年生であった。彼らをいかに In-café に呼び込み定着させるかを考え「身近なことを簡単に取り扱う」ということを行うことにした。それによって始まったのが「10min.talk」である。これはかつて行っていたイベントを復活させたものであり、内容は10分間を自由に使い自分の伝えたい事、やりたいことを行うというものであった。いきなり難しい内容を行っても人は来ないと考え4月中は部活を対象を絞り、多くの部活にプレゼンや実技などを行ってもらった。多くの人が部活に関心がある時期ということもあり、多いときでは30人を超える人を集めることができた。

その後はテーマを決め自分が話したいことを話して

もらうという形で 10min.talk というイベントを続けた。1年生の6月に行なう地理実習の時には、レポートで高得点を取った上級生を呼んで話をしてもらうなどその時に応じてイベント内容を変更していった。これは短時間でできることから、主に昼休みを利用して行ったため、委員会やミーティング等のない日を狙えば、生徒も気軽に参加できるようである。また内容の面でも、1年生にとって初の大作レポートの作成に絡んだテーマに関して、先輩の技術を吸収しようと多くの1年生が参加した。



図3 10min.talk などのイベント

しかし、4月からの目標である、“1年生の In-café への定着”に関しては、昼休みの活動が、メインのイベントでの集客に直接結びつけることが十分でなく、徐々に少ない人数でのイベント開催となってしまった。この主な原因は1年生が部活に入ったからであることは明白であった。「部活を休めないから」との理由でイベントに参加できないという声がよく届く。部活のあり方そのものを容れさせることができれば良いのだが、これは一枚岩ではないし、学校というものは多様な考えで構成されている集団である。スタッフとしては、部活で大事な練習等を休んでイベントに参加して欲しいと思っているわけではないのだが、その生徒の人生の中で部活を休んでも参加したいという魅力的なイベントを企画し、そこにたまには部活を休んで関心のあるイベント等に参加しても良いという、部の他者理解の雰囲気構築できないかと考えている。これには年単位で時間がかかることが安易に予想できるため、今すぐ出来る事として、イベント時間の短縮が提案された。部活に遅刻することにはなるが、1時間イベントに参加して、その後部活に出れば部活も1時間は出ることができる。このような時間設定をしていくことが、イベント参加者に対しても、部活のメンバーに対しても、折衷案となることを期待している。

一方で放課後を利用し、長時間にわたって行ったが大盛況だったイベントもある。3年生が企画を行った『最

高は最適じゃない～医者が語る3.11～』の講座だ(図4)。



図4 生徒が企画したイベントのポスター

このイベントは、2年の3学期に社会見学実習でお世話になった王子生協病院の先生のお話を、もっとたくさんの生徒に聞いて欲しいと考えた生徒が、日程調整・場所の手配、機材の手配などの打ち合わせを行い、内容についても調整して In-café で実施した。事前の打合せも実施している。

また、イベントの参加者には、メールを使って事前に「地域に寄り添うような医療活動を行っている」と聞いていますが、病院の先生(医師)に聞きたいことなどがあればご連絡ください。」というような連絡を取っている。このように、聞きたいことがある人に直接連絡を取り、また、生徒のニーズを踏まえてじっくり企画をして運営まで至ったこのイベントは、多忙な現実にあまり左右されずにたくさんの参加者を集めた(図5)。



図5 『最高は最適じゃない～医者が語る3.11～』

今年度は、ワークショップ形式でないイベントも行った。初めての試みである「フォトコンテスト」だ。これは普段 In-café に入出入りしない人にも気軽に出入りしてもらおうといった思いのもと、2年生が中心となって3年生の有志や1年生スタッフとも協力し、運営方法も生徒が考えてこなしていった。

形式は、まず件名にフォトコンと記載した上で In-café のメールアドレスに空メールを送ると以下のような返信がきて、エントリーができる。

『このイベントはポスターにも記載されている通り、優劣を決めることが目的ではなく、あくまでも写真の楽しさを広く知ってもらうことが一番の目的であり、我々の願いです。応募していただいた写真は通常の写真印刷に使われるL判サイズを遥かに超えるA4サイズでプリントし、会期終了後に参加賞としてお返し致します。投票方法は方眼紙に丸シールを貼っていただくだけの簡単なものになっておりますので、授業の合間や昼休み、放課後などの時間にお気軽にお越しください。

応募要項

1. 自分が撮った写真のみ応募することができます。
2. 以下の3つの部門から最も適した部門にご応募ください。
 - ・スマホ部門（ガラケー、コンパクトデジタルカメラ等もこちらになります。）
 - ・ハイエンドカメラ部門（マニュアル露出が可能なカメラで撮影された写真はこちらです。）
 - ・加工写真部門（写真加工アプリやPhotoshopなどの画像編集ソフトを用いた写真向けの部門です。白黒化やRAW現像はこれには含まれませんが、極度なHDR加工等は加工写真とみなされます。）
3. 原則、出品者の名前は伏せられますが、もし希望があれば出品者の名前を掲示することも検討致しますのでその旨をご連絡ください。

4. プリントは原則 A4 の写真用光沢紙としますが、こちらが写真の画質が引き伸ばし印刷に耐えないと判断した場合は A5 ないし L 判サイズでの印刷になりますのでご了承ください。
5. 顔が写っているものについては事前に全員の許可が必要です。
6. ご応募の際は以下の項目を記入し、作品を添付して ○○@gmail.com 宛に送信してください。*印のついている項目は必須です。
 - ・タイトル
 - ・名前*（公表はされません）
 - ・学年、クラス*（公表はされません）
 - ・作品の説明、コメント等
 - ・撮影地
 - ・メモ、備考、希望、連絡事項等
7. 枚数については今のところ制限はありませんがこちらの予想を超える応募があった場合、応募枚数の多い方にはそのうちの何枚かを選んでいただくことになる可能性がございますのでご了承ください。
8. 応募締め切りは10月4日までとさせていただきます。』

コンテストの概要は、作品が集まり次第、ホワイトボードに公募した写真を張り付け、良いと思ったものにシールを張ってもらうというものである。展示期間中に学校説明会があったため、対外的な目も票に入れることができ、内部でも1週間の展示期間に張ってあるホワイトボードはすべて置いたままにしていつでも見るようにして票を集めた。最終日には写真講座を行い、写真の楽しさを知ってもらうという目標達成のために工夫を凝らした。

このイベントには、通りがかりの本校生徒だけでなく、本校教員、学校説明会参加者など、様々な人がかかわった中で、写真の楽しさを共有することができた。



図6 フォトコンテストポスター

2015 11月 LINEアカウント登録してね!

In-café

学芸の秋、文化の秋…In-Caféに来て、たくさんの新しい発見を!

01	02	03	04	05	06	07	
		文化の日		放課後【心算学習】 伊藤選手さん -○○-	放課後 第5回 韓国語講座 第4回 英語講座 グローバルカフェ 13		
08	09	10	11	12		14	
		61期生 学習旅行 60期生 実力試験					
15	16	17	18	19	20	21	
	放課後 第4回 タイ語講座	62期生 球技大会		5日(月)~9日(金) 附属フォトコンテスト 展示期間	放課後 第6回 韓国語講座		
22	23	24	25	26	27	28	
	放課後 第5回 タイ語講座	放課後 第5回 タイ語講座		24日(水)~27日(土) 昼休み 附属フォトコンテスト	【公開教育研究大会】	【公開教育研究大会】	
29	30						
	放課後 第6回 タイ語講座		代休				
05	07	Information ①本イベントの詳細は、各クラス開講のポスターをご覧ください。本イベントは10月24日現在が開催中です。 ②本イベントは、多岐様な内容の企画を予定しております。また、本イベントは多岐様な内容の企画を予定しております。 ③講師：【英語】東京学芸大学 多岐様な文化研究 CHUN SEUN さん / 【タイ語】第4回タイ語講座 開催 伊藤 選手さん / 【韓国語】 ④本イベントの開催については、各校のホームページをご覧ください。なお、電話番号は〇〇〇です。お申し込みは、お電話またはメールにてお願いいたします。 ⑤、第6回タイ語講座は11月6日(金)です。なお、電話番号は〇〇〇です。お申し込みは、お電話またはメールにてお願いいたします。 ⑥、第6回タイ語講座は11月6日(金)です。なお、電話番号は〇〇〇です。お申し込みは、お電話またはメールにてお願いいたします。					

図7 In-caféの予定

In-café イベントアンケート

本日は In-café のイベントにご参加、ありがとうございます。
よろしければ以下のアンケートにお答え下さい。

<イベント開始前にお答え下さい>

- ・参加するイベントは得ですか。
月 日 (昼休み・放課後) ? _____
- ・このイベントを知ったきっかけは得ですか。
(教室ポスター・Twitter・女子ロッカー前の看板・放送・その他)
- ・参加しようと思った理由・イベント前の感想を教えてください。

<イベントの後にお答え下さい>

- ・参加した感想や、内容についての感想があれば教えてください。
- ・その他 In-Café についてご意見・ご要望があれば教えてください。
- ・最後に、学年・クラス・名前を教えてください。
(1・2・3)年 _____ 組

ご協力ありがとうございました。お近くの Staff までお話し下さい。

図8 アンケート用紙

2-2-3 イベントの宣伝

これらのイベントの告知はどのように行なっているのか。そもそも In-café が何を行っているかわからなければ来にくいと考えたことから、今年度は毎月予定表をクラスに配布することにした(図7)。また In-café 通信という広報誌の作成も行った。それに加え学校説明会の時は外部向けに活動についてのポスターを作製し、In-café を解放して取り組みの宣伝をした。

生徒との距離を縮めて集客に繋げる試みとしては、Twitter・Facebook・LINE の公式アカウントを起動させている。特に今年度は、学生のほとんどが使用している LINE の公式アカウントを作成し、1対1の質問にも答えやすく、こちらからお知らせを一斉送信することもできるようになった。

FacebookとLINEは年度の初めは上手く稼働しており、活用している生徒も多かったのだが、スタッフの多忙と、Twitterのリツイート数が一番多いことから、Twitterでの宣伝がメインになりつつある。内容としては、イベントのポスターができ次第イベントの宣伝を投稿するというものだ。また、イベントが終わった後にも報告のツイートを流している。しかし、このような宣伝方法においては、学年での引き継ぎがうまくいっていないのが問題点としてあがっている。2年生が学習旅行に行く11月までには、徐々に1年生に宣伝の仕方を引き継いでいき、多忙の中でも宣伝をしていく人材を増やす必要があるようだ。

2-2-4 ふりかえり方法

このような生徒の取り組みに対しては、例えば In-café に来た生徒が自身の変容や成長を実感することのできるような試みの提案を教員の方で行なった。提案内容としては、講座等を受ける前と後でアンケートをとって、その回の自身の変容をメタ認知する仕掛けを設けるだけでなく、ポートフォリオのようにそのアンケートをまとめていき、長いスパンで継続的に参加者の変容を伝えるためのしくみづくりをしたらどうか、というものであり、また、疑問や指摘を持って意見を述べる力は社会に出てから必要なものとなってくるため、その重要さに気づかせて訓練をしていこう、というものであった。

その結果として、アンケートをとっていくことを生徒は試みたのだが、その意図が参加者に伝わりきらない現状が拭いきれず、また、2年生と1年生のスタッフ間での引き継ぎが上手くいかない現実もあって、参加者習得につなげることができなかった。

この課題を踏まえ、アンケートの内容を精選し、アンケートをとる意義の告知を普及させていこうとしている段階である。以上のように、今年度の成功点は上手く連携をとって引き継ぎ、うまく行かなかった点は振り返って課題をみつめ、改善を試みようとするスタッフは奮闘している。教員の方でも、上手くかかわることで、スタッフとともに学校全体を良くしていきたいと考える。

(文責：永尾)

2-3 東北での学習

2-3-1 第4回東北スタディツアー

ここでは、In-café で継続的に実施されてきた「東北スタディツアー」と、公民と地学のコラボレーション授業「リスク社会と防災」との連携の様子について紹介する。なお、昨年度から実施している連携についての経緯は、加納・齋藤 (2015)⁴⁾ を参照のこと。

2-3-1-1 東北スタディツアーの実践

東北スタディツアーは、仙台市(東北大学)、東松島市南三陸町、気仙沼市の4カ所での活動を行った。その中から、東松島市での活動の概要とその意図を示す。

活動 東松島市での活動 9/19 (土) 午後

【概要】

新しく高台に移転したJR 東名駅から、野蒜地区の復興の状況を案内してもらった。野蒜地区は津波被害も大きく、その様子を見学するために、第1・3回目のスタディツアーでも訪れている。高台を切り土してつくられたJR 東名駅を含む新しい造成地や、震災遺構として保存されている旧 JR 野蒜駅を見ると、津波被害の凄まじさとともに、1回目のスタディツアーからの4年間の時間の経過を感じさせられた。次に、海岸地域に移動し、公園跡地に建設されたメガソーラーを見学した(図9)。海側には二線堤である T.P.10m (T.P.: 東京湾の平均海水面) の盛り土が高くそびえていた。

最後に、東松島みらいとし機構 (HOPE) の活動の様子や東松島市の復興の様子について説明して頂いた。HOPE の活動の背景にある CSV (共通価値の創造) という考え方や、東松島の被災した土地でつくった大麦を利用した地ビールづくりの進捗状況、被災地で進む農業の大規模化・法人化の現状など、様々な視点からお話を伺った。

【意図・趣旨】

- ・東松島市における津波被害や復興の状況を調査することができる。
- ・復興が進んでいない気仙沼市や南三陸町に対して、復興が進んでいる東松島市の状況を比較することができる。
- ・復興計画を進める側である行政の立場の意見を伺うことができる。
- ・昨年からの復興の進展を観察することができる。



図9 東松島・メガソーラーの見学

2-3-1-2 In-café との連携

昨年度は、In-café にて東北スタディツアーの事前授業を実施した。対して、今年度は参加希望人数が多かったため、In-café 以外の場所で事前授業を実施した。そのため、現在まで具体的に In-café とは連携を行ってはいない。しかしながら、今年度、ツアーを実施した結果、多くの生徒が震災の記憶を風化させず、復興の一助になりたいという思いを強くした。そこでその対策として、これまで4回の東北スタディツアーをまとめるような、デジタルアーカイブを事後学習の一環で作成する計画になっている。また、今後、東北スタディツアーの報告は行う予定であるが、その場の一つとして In-café を検討している段階である。 (文責 齋藤)

2-3-2 東北ボランティア2015

(1) 研究仮説

【受講生徒の研究仮説】

- ① 化学発光について理解し説明することができる。
- ② 化学の実験の課題を解決するために試行錯誤しながら実験し、解決することができる。
- ③ 小学生に科学の面白さを伝える展示を自由に工夫しながら計画、準備、実施することができる。
- ④ 実験の内容、原理を正しく把握し、実験ステージの手伝いを的確に行うことができる。
- ⑤ 震災の被害や復興の現状と課題について実際に現地の人々とふれあい学びとる。

(2) 実践報告

参加生徒 10名、引率教員 3名

第1日目 10月4日ー山形大学理学部 SCITSA センター訪問、特別講義実験

午前中に東京を発ち、14時すぎに山形大学小白川キャンパス内 SCITA センターに到着。山形大学理学部物質生命科学科栗山恭直教授から、化学発光をテーマとした

実験講義講習を受けた。また、科学実験する際の、条件統一の重要性について実験を通じてお教えいただいた。

さらに、次の日に宮城県石巻市で行う実験ボランティアについての準備をした。

第2日目 10月5日—宮城県石巻市イオンショッピングセンターにて、実験教室体験ボランティア

早朝、山形市を発ち、山形大学理学部の研究室の方々とともに宮城県石巻市イオンショッピングセンターに向かった。これは、山形大学が主催して震災後ずっと実施して来ている「化学で東北を盛り上げ隊」の企画の一つにボランティアで参加したものである。生徒達は、2つのグループに分かれて、被災地の子供たちに科学的なおもちゃを紹介し一緒に実験を楽しんだ。具体的には、一つのテーマは「ベンハムのコマ」、もう一つのテーマは「くるくる落下傘」であった。

さらに、ショッピングセンター内の仮設ステージにおいて、化学マジックショーのステージも実演し、こども達に紹介することができた。 (文責 岩藤)



図10 山形大学での実験風景



図11 実験ブースの様子



図12 ステージに集合したスタッフ

2-4 実践共同体の形成に向けた今年度の活動

本年度は、「共通の興味関心を持つメンバーが、互いにコミュニケーションしながら共同の活動に従事するコミュニティ」と定義される (Wenger, 1998)⁵⁾、「実践共同体」の形成に向けた活動方法も模索した。

具体的には、教員を中心に共通の興味関心を持つメンバーが集まれるよう、「附高の先生のあたまの中」という講座を開いた。この講座は、お昼休みの30分と放課後の1時間30分の2部構成にしており、教科別に本校の教員を数名ゲストとして招いた上で、ホストや生徒から出される質問に対して回答してもらう形式を取った。お昼の部では教員のこれまでの経歴を話してもらうとともに、ホストが「その教科を学ぶと、世界の見え方がどう変わるのか」という質問をして回答してもらった。次に、放課後の部では生徒達が出した質問を分類した上で、興味深い話が引き出せそうな質問を教員に回答してもらった。

実施については、5月に地学の教員2名、6月に化学の教員3名、9月に国語の教員3名、11月に歴史の教員3名をゲストとして呼び、開催した (なお、4月は研究者のキャリアに関する講座、10月はプロジェクトの進め方に関する講座を開いている)。例えば、歴史の教員をゲストに呼んだ会では、「歴史を学ぶと、世界の見え方がどう変わるか」という質問に対して、色々な民族の歴史を学ぶことで他者に対して寛容的になれたという回答や、物事の背後にあることがより深く見通せるようになったという回答が出され、生徒にとってその教科を学ぶ意義を深められるきっかけになったと考えられる。

また、国語の教員をゲストに呼んだ会の最後に、「先生達と今後一緒にやってみたいこと」を生徒に書かせて発表させたところ、「1冊本を読んで語り合う」、「リレー小

説を書いてみたい]、「芸術としての文学について一緒に考えたり、話したりしたい]、「本1冊とか短編小説の深読みを(したい)」など、国語の実践共同体に発展できそうな「種」を蒔けていたといえる。ただし、この講座の後にどれだけ「実践共同体」が形成されたのかについては未調査である。この点については、評価方法も含めて今後の課題とする。(文責：池尻)

3 In-café の効果検証

3-1-1 今年度の評価

今年度の評価は、In-café に対する評価としてこれまで扱えていなかった3つの観点から行う。具体的には、「外部講師による講座聴講の効果」,「In-café スタッフの社会的ネットワークとその効果」,「長期的にみた In-café スタッフの成長」について、それぞれ調査を行った。以下で詳細に説明していく。

3-1-2 外部講師による講座聴講の効果

1つ目は、In-café で最も多く開催されている外部講師の講座に関する学習効果の評価である。外部講師(もしくは生徒)による講座は In-café で最も多く開催されてきたにも関わらず、これまではその直接的な効果は検証していなかった。

In-café は「知のコラボレーション」を生み出す場として位置づけられてきており、実際にこれまでの In-café では様々な分野の講師やゲストが呼ばれ、高校生活だけでは触れ合えない独自の情報を生徒に提供してきたといえる。このような講座を聴講することで、その分野の新規な知識が習得されることは容易に想像がつくが、同時に、講座を聴講するだけで問題解決能力が向上したり、主体的な学びが促進されるとは考えられにくい。そのため、講座の聴講が、どのように「自主的な活動」をサポートしうるかについては考察されていなかった。

本稿ではこのような状況に対し、外部講師の講座聴講には、自主的・主体的な活動の起点として重要な「疑問」を生成する効果があるのではないかと仮説を立てる。そこで、外部講師の講座聴講を通して、その分野に対する疑問がどのように変わるのかを評価した。

対象とした講座は、2015年5月11日に開催された「最高は最適ではない」という講義型の講座である。この会では、王子生協病院の泉水信一郎先生を講師として招き、主に東日本大震災後に医師として支援活動に行った時の話を聴くという構成になっていた。

評価方法としては、「イベントテーマに関連して、疑問

に感じていることを思いつく限り書いて下さい」という質問を、イベントの事前と事後で記入してもらった。時間については約3分を前提にした。事前と事後両方の質問紙の質問に回答した生徒は5人だったため、以下の考察は形成的評価の意味合いが強いことを注記しておく。

事前と事後の質問紙における回答をまとめたものが表2である。番号は回答者を表している。事前と事後の結果を比較すると、①, ②, ③, ⑤から見られるように、過去の事実に対する疑問から、未来志向・応用志向の疑問に変容する傾向が見られた。また、④は事前の段階で「首都直下地震にいかせる教訓は?」という応用志向の疑問が含まれていたが、事後では過去の事実に対する疑問がなくなり、応用志向の疑問だけ残っている。

このような変容から、外部講師の講座聴講は、単にその分野の疑問に対する事実に知識を提供するだけでなく、その分野に関する、未来志向・応用志向の疑問を生成させる効果があるといえる。

ただし、事後の疑問をより詳細に分析すると、自分事として疑問を生成していたと判断できる学習者は①, ③, ⑤であり、②, ④の学習者は外部講師に問かける疑問となっている。

このような結果を総合すると、外部講師の講座聴講はその分野に関する未来志向、応用志向の疑問を生成させる効果が考えられるものの、全てが自主的・主体的な活動の起点となる疑問が生成されるわけではないといえる。

そのため、講座聴講だけでなく、より自分事として疑問を醸成させる時間を組み込んだり、講座終了後に外部講師と一緒に疑問を解いていけるような環境を作ったりする工夫が必要になるといえるだろう。

表2 講座聴講の事前事後において生成された疑問

①	<p>【事前】最高が最適でないなら、どのようなことが最適なのだろう。東日本大震災のとき、どのような専門の医師の方々がいて、どこでどのようなことをしていらしたのだろう。災害の現場での医師の方々の仕事は何だろう。</p>
	<p>【事後】最適をつくり出すために大切な力はコミュニケーション能力以外にどのような力があるだろう。その力を伸ばすために普段の生活で何ができるだろう。足の状態が悪化してしまい、切断することになってしまった方の場合のように、最高が最適だという考え方の人と仕事をするようになったら、どうすればいいのだろう。</p>
②	<p>【事前】「最高」が「最適」でないというのは具体的にどういう場合なのか。家庭医療医とはなにか。医師でない人でもできることはあったのか。一番、困った点は何だったか。あの現場で「医療」というのはどこまでできたのか。</p>

②	【事後】最適なことを行うにはどんなことをすればいいと思われますか。
③	【事前】「テレビに映らないタイプの医者」という話を宣伝をきいたが、どんなお医者さん？東日本大震災の時に、医療関係の人がどのような支援をしたのか。
	【事後】震災などの自然災害での教訓をもっと効果的に国民に伝えるすべはないのか。
④	【事前】東北から学んだ、東京の首都直下地震にいかせる教訓は？どういうケアが必要か？（今の医療から見て）。今、東北大震災以降、東北に行く機会はある？ネパールはどうだった？
	【事後】首都直下地震にいかせることは？
⑤	【事前】お医者さんの仕事は何か。やりがいは。大変なことは。被災地へ赴く医者にはどんなことをするのか。日頃の生活・仕事は？被災地の復興はどれくらい進んでいるのか。医療手当ては十分なのか。将来の医療体系には何が求められるのか。
	【事後】被災地支援の、各団体の連携の悪さについて、反省して、後世に活かすような機関はないのではないか。日本の医学教育に問題、不足があるのではないか。今日伺ったマネジメントや活動における考え方を、これからの生活に活かしたり、辛夷ではどう活かせるか考えてみたい。

3-1-3 In-café スタッフの社会的ネットワークとその効果

2つ目は、In-caféの企画・運営を行うスタッフが、どのように学外の人と社会的ネットワークを築き、それがどのような効果をもたらしているかの評価である。宮城ら(2013)¹⁾では、In-caféがスタッフに対してどのような知のコラボレーションの機会を提供したのかについて、社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)の観点から分析し、In-caféは部活や委員会などと比べて、「学外の人とのネットワーク」が構築されやすいことを量的に示した。

しかし、実際に学外の人たちとどのような社会的ネットワークを築き、どのような学習効果があるのかについてはわかっていなかった。そこで、In-caféの運営スタッフ4名(うち1名は3年生)を対象に、半構造化インタビューを行った。インタビュー項目は以下の4つである。

- (1) In-caféの活動を通じて知り合った学外の人はいいますか。その人とはどのような関係で、具体的にどのような活動を行いましたか。
- (2)(1)で答えてもらった学外の人と接することによって、感じたことや得たことはありますか。
- (3)(1)で答えてもらった学外の人との「関係性」で、うまくできた/うまくできなかったと思うところがありますか。それは、どうしてですか。

(4)(1)で答えてもらった学外の人との「関係性」で、今後改善したいところはありますか。

インタビューは10月末～11月中旬にかけて実施し、記録した音声データをもとに、In-caféの運営スタッフと学外の人との社会的ネットワークのあり方を分類した。その結果、モデル型ネットワーク、共同型ネットワーク、請負型ネットワークの3種類が導出された。以下では、導出された各ネットワークの詳細と、どのような効果があるのかについて紹介する。なお、アルファベットは学習者を示している。

(a) モデル型ネットワーク

1つ目のネットワークは、社会人や専門家など、イベント企画に関して生徒のモデルとなるような人と紐帯になっているもので、モデル型ネットワークと名付けた。

このネットワークでは、モデルとなる人々とイベントの打ち合わせ等を行う中で、以下のように企画・運営、発表内容に関するノウハウが学ばれていることが推察された。

Tさんとやったイベントのときに、その最初のときは、Tさんが一回その前に会って打ち合わせをしようって言うてくださって、じゃあいきますって感じだったんですよ。そのときに、ああ、イベントってこういうふうにつくるもんなんだなって思って。(A)

(b) 共同型ネットワーク

2つ目のネットワークは、モデル型ネットワークと比べて立場や年齢が近く、共同で企画・運営を行うなどの結びつきの強い紐帯になっているもので、共同型ネットワークと名付けた。

他の人に臆せずしゃべるようになったっていうのはありますね。(中略) In-caféがなければ、すごい他人だったろうな、絶対かかわりなかったなという人と話すところなる。あと、年上っていうのもあって、普段だとすごい距離感感じるけど、ある程度繋がりはあるんで、砕けて話して。(C)

このネットワークでは、学外の人と密接な関係を築き、共同活動を行うことを通じて、以下のように自分自身や自分たちの活動への内省が促されていることが示された。

一緒に相談して、むこうがプログラムとかポスターとかをつくって、こっちで掲示をして当日一緒にやって、そのあと反省会やってって感じで。イベント一緒につくってるみたいな感じだったので、反省みたいなものだいたいやってましたね。(A)

自分の、なんか目標みたいなのが、アバウトだったんですよ。でも、それが、プロジェクトをやるうえで、やりたいこと、目的を決めるんですね。そのための手段としてのプロジェクトをやるんですけど、目的を掘り下げてったときに、ああ、僕ってこんな野心もってたんだなあってことに、自分で気づかなかった。(B)

(c) 請負型ネットワーク

3つ目のネットワークは、モデル型ネットワークや共同型ネットワークとは異なり、イベントの企画などを一緒に行わず、イベント当日の運営や参加のみの弱い紐帯になっているもので、請負型ネットワークと名付けた。

内容が決まっている場合は、そんなに打ち合わせはしない。(A)

このネットワークは、他者からの影響が少ない。しかし、以下のように出会う人との会話のあり方や生徒自身の興味関心によって、より親密なネットワークを構築させることは可能であると考えられる。

ここでイベントしていただきって知り合うって感じですね。(中略)話してるときの距離とか、一方的にずっと話されてるような人だともまああんまり近寄りたみたいない感じがあるんですけど、むこうからもきいてくれたり、話こっちにさせてくださるような人だったら、もっと話してみたいかなって思うので、あと自分が興味ある分野か、そういう分野じゃないかというのはありますか。(D)

以上の分類のうち、モデル型ネットワークと共同型ネットワークを通じた学習効果は明確であり、請負型ネットワークよりも良い形態だと考えられる。そのため、できるだけスタッフの興味・関心に合った企画を担当させ、請負型ネットワークからモデル型ネットワークもしくは共同型ネットワークに移行させるように支援することが重要である。

一方で、社会関係資本は、人々が何らかの行為を行うためにアクセスし、活用する社会的ネットワークに埋め込まれた資源(Lin, 2001)⁶⁾として定義される。そのため、社会的ネットワークそれ自体では生徒にとって利益をもたらす社会関係資本とはいえない。つまり、そのネットワークを築いている行為者自身がその社会関係に埋め込まれた資源に気づき行動する必要もある。

そこで重要になるのが、いかに社会的ネットワークを維持するかと、どのように社会関係に埋め込まれた資源に気づくかである。この点に関して、うまくネットワークを維持している生徒の方略を分析したところ、以下の

ように、FacebookなどのSNSを積極的に利用して学外の人と繋がり、必要な場合に連絡をとることができる状態をつくっていることがわかった。また、SNSでは自分の思考や悩みが共有されやすいことから、特に学外の人から声をかけてもらい、社会関係に埋め込まれた資源に気づくと同時に、社会関係資本を獲得していたことも示された。

1回だけこういうことで悩んでますみたいな投稿をしたときがあって、そんなときはTさんや他の方も結構コメントしてくださったっていうのがあって、そのコメントからメッセージにいて相談のってもらったりとかはありました。(A)

こっちがfacebookに投稿していると、あ、こういうこと考えてるんだっていうのをわかってくれるので、この前こういうこといってたけど、こういうプロジェクトたちあげてるんだけどみてみない?って言ってくださったり、イベント来てみないかな?っていうのを招待してくださったりするし私もそういう方がたの投稿をみて、こういうこと考えてるからちょっとお話しかがってみようって思うことはあるので。(D)

以上より、できるだけモデル型ネットワーク、共同型ネットワークを構築できるように支援しつつ、SNSなどを用いてその社会的ネットワークを社会関係資本にさせるようにすることで、より「活動の幅を広げる人的なネットワークの醸成」につながると考えられる。

3-1-4 長期的にみたIn-caféスタッフの成長

3つ目は、In-caféスタッフはどのようなタイミングでどう成長するのかに関する長期的な観点に立った場合の評価である。これまではIn-caféスタッフの学びについて、単年度の効果検証を中心に行ってきたが、年度をまたいだ成長について分析することで、長期的観点からの知見が得られると考えられる。

In-caféは開始から4年立っており、In-caféのスタッフとして1年生から3年生まで関わった生徒が存在する。そこで、1年生の4月からIn-caféのイベントに参加し、1年生の11月頃から運営に関わり始め、2年生の12月頃から後輩に運営を引き継ぎ、3年生になってから2回外部の講師を呼んで企画を行ってきた、3年生のスタッフI氏を対象に、2015年10月に半構造化インタビューを行った。

最初の質問は「3年間In-caféに関わった中で、最も自分の成長につながったのは、いつ、どのような活動をしていた時ですか。また、どのように成長したと感じていますか」である。これに対し、I氏が挙げたものは、

2年生の12月頃から行っていた「後輩への運営の引き継ぎ」であった。

そして、この時をきっかけに、周りのニーズを考えたり、論理的に訴えかけるアプローチから、自分のやりたいことを伝えて引っ張っていくアプローチを取る方が良いという考えに変わったことを述べている。

1番大きいのは、そこで、つべこべ言わずにやってみようっていうようになった。(中略)生徒のニーズを考えるとこうだからとか、色々考えた結果、こう全部自分の中で戦って、全部潰し合っている感じだったんですけど、最後の最後、もうどうしようもないから、とりあえず自分が最初っからここまでやりたかったことって何なんだろうと思って、じゃあ、もうとりあえずそれをやろうと。(I)

そこまでは、(省略)、こういうことがやるのが必要なんだみたいな言い方をしていた。こう論理的に訴えかけようとしていた。頭の方でみんなにやってもらおうとしていたんですけど、そこをもうやめて、自分はこうしたいから手伝ってくれて素直に言っちゃったのもそこが初めて。(I)

そして、実際に後輩に対して引き継ぎを実行する中で、自分の考えに対して振り返る契機になっていたり、これまでの経験を活かすことにつながったりすることが示された。

人に伝わる形で、自分が考えていることをまとめるとかもそこに来て初めてやってみたことだと思うし。色々そこまで考えていたことが、そこにきてやっとまとまって、なんかその1つのものにまとまったというかまとめざるをえなかった。(I)

周りの人を巻き込めるようになって、初めて、その進め方とかを、例えば予定の立て方とか進め方とかメモの取り方を学んでいたことが、活かす場ができたというか、初めて全部こうつながって。(I)

次に、「引き継ぎの中で、うまくできた／うまくできなかったと思うところはありますか」という質問をしたところ、うまくできたこととして、以下のように最低限の組織作りが挙げられていた。

とりあえず、In-café がなくなっていくという目標自体は引き継ぎで達成して、関わる人が0人っていう状況は避けられた。(中略)途中から結構本人達が楽しそうにやってみて、僕がいけない時でも朝ミーティングやってみたり、放課後話していたりだとかあって、その気持ち的な部分は、伝えるっていうか影響することはできたのかな。(I)

一方でうまくできなかったことについては、以下のよ

うに60期(I氏の学年)のIn-café に対する捉え方や文化観を挙げていた。

60期で考えていたこととかは、たぶん正直伝えられていないと思う。(中略)60期がIn-café っていう場所っていう要素にすごいこだわってたっていうのは伝わらなかったと思う。(I)

その後、「それは、どうしてうまくできましたか／できませんでしたか」という質問も行った。その結果、組織作りがうまくできた理由としては、以下のように、他の人達を巻き込まざるを得なかったという制約や、そこから生じる責任が大きかったことを挙げていた。

僕の取り組み方もたぶん違っていただかなって自分では思っていたりして。そこまではやっぱり、最悪自分1人でやればいいやってどこかで思っていたのが、この人達を巻き込まなきゃやばいって思ったから。相手と本当に話したというか、それはやっぱり大きいと思う。その人達がやる気になるにはどうしたら良かったっていうことを考えた。(I)

一方、In-café に対する捉え方や文化観をうまく伝えられなかった理由としては、以下のように、勧誘時に提示していたIn-café のイメージが偏っていたことと、1年生に何かをさせることができなかったことを挙げていた。

最初の勧誘の段階で、たぶんすごい偏った言い方をしちゃったせいで、同じような人達が集まってきちゃったっていうか、色んなことをやれますよっていう要素をもっときちんと押し出してれば。押し出した上で、最初から色んなことをやってもらえる空気を作らなきゃいけなかった。(I)

特に1年生は何かやってもらおうっていうことがあんまりできなかったんで、(中略)逆にイベントのことをやる以外のことを知らなかったから、それは仕方がなかったのかな。(I)

このような長期的にみたI氏の成長に関する分析は、どのような運営方法を取り入れるとIn-café スタッフの成長が促されかについて、いくつか重要な教訓を提供している。

1つ目は、自身の学びを応用させる機会を設けることが、In-café スタッフの成長につながるということである。I氏の場合、それは運営のノウハウの引き継ぎであった。In-café スタッフにとって、自分達の行ってきた内容の振り返りが学習上重要であることは宮城ら(2013)¹¹でも指摘されているが、これは1つの企画における学びを高める方法であり、長期的に積み重ねてきた経験を振

り替えさせる際は、実際にそれらの経験を応用させる一種の制約を課すことが効果的だと考えられる。

2つ目は、企画を実行しなければいけない状況を作ることが、In-café スタッフの成長につながるということである。I氏の場合、2年生の12月のタイミングで後輩に運営のノウハウを引き継がなければIn-café スタッフが途絶えてしまうという状況になっていたが、これが企画を実行させる強力な要因になっていたといえる。そのため、強制力を持って企画を実行させる制約を課すことが効果的だと考えられる。

3つ目は、論理的に企画を作らなければいけないという考えを捨てることが、In-café スタッフの成長につながるということである。In-café での企画は、ゲスト、教員、学生のニーズ、In-café スタッフのニーズなど、多様なステークホルダーが関わっているため、I氏も言及しているように、各ニーズの整合性を保つこと自体が困難であり、それが企画の実行の障害になりやすい。I氏はこれに対し、論理的にやらなければいけないことを周りに説明するのではなく、やりたいことを周りに説明するというアプローチを取り、それによって実行に移れている。In-café スタッフは企画や運営を繰り返すうちに、徐々に多様なステークホルダーがいることに気付いていくが、一定の段階になったら、多様なニーズの整合性を気にさせず、自身のやりたいことだけに目を向けさせるように支援することも重要だといえる。

3-1-5 今年度の考察と次年度に向けた改善策

上述したように、In-café の目的には、活動のきっかけとなる種を蒔くことが挙げられている。この種を蒔く点については、未来志向、応用志向の疑問の生成を促す外部講師の講座聴講がその一翼を担っているといえる。

また、同じくIn-café の目的に挙げられている、活動の幅を広げる人的なネットワークの醸成については、In-café スタッフの企画・運営を通して形成されたモデル型ネットワークや共同型ネットワークが該当すると考えられる。さらに、企画後もSNSなどを通して普段の考えや悩みを共有することで、社会関係資本を獲得すると同時にネットワークが維持される事例も見られた。

さらにIn-café スタッフの成長を長期的に分析した場合、自身の学びを応用させる機会を設けたり、企画を実行しなければいけない状況を作ったり、論理的に企画を作らなければいけないという考えを捨てることで、一定の運営を経験した後の成長を促す上で重要である可能性も示された。

一方で、これら3つの評価に共通する課題として、「講座聴講をした生徒—外部講師」、「In-café スタッフ—学外の人」、「In-café スタッフの先輩—後輩」のそれぞれにおいて、モデル型もしくは共同型ネットワークをどう構築させるかが挙げられる。

まず、講座聴講をした生徒と外部講師のモデル型もしくは共同型ネットワークの構築については、講座当日には、イベント後に講師と個人的な会話ができるような時間を設け、コミュニケーションを促す工夫が有効になるだろう。また、講座後でも両者のネットワークが途切れないように、例えばFacebook グループなどのSNS 上でのグループページを設け、継続的に疑問を共有したり、議論が続けられるようにする工夫も有効だろう。

次に、In-café スタッフと学外の人とのモデル型もしくは共同型ネットワークの構築については、興味・関心が合ったスタッフを企画の担当につけることが重要である。そのため、事前にスタッフ間でお互いの興味・関心を共有させ、できるだけ請負型ネットワークにならないように調整させることが必要といえる。

最後に、In-café スタッフの先輩と後輩のモデル型もしくは共同型ネットワークの構築については、先輩と後輩のペアで運営を進めさせることが効果的といえる。I氏の場合、引き継ぎが最も成長につながったと述べていたが、12月頃に1回だけ行うよりも普段から行う体制にする方が有益といえる。そこで、興味・関心のあう先輩と後輩がペアになって企画を進めることを提案したい。これによって、I氏が課題として挙げていた、言語化しにくいIn-café に対する捉え方や文化観も伝えられ、同時に後輩も企画を実行するという経験を積むことができる。また、In-café スタッフを採用する条件として、例えば3ヶ月以内に1つ企画を実行しないといけないという制約を設けることは、モデル型もしくは共同型ネットワークの構築を促進させるだろう。

以上をまとめると、In-café スタッフの組織構成に対しては、はじめに各自の興味・関心を正確に把握し、一定期間内に企画を行わなければならないという制約を設けた上で、興味・関心の近い先輩と後輩をペアにさせ、引き継ぎを行いながら企画を実行させる経験を積めるような運営デザインが望ましいといえる。また、各講座に対する追加支援として、外部講師と継続的に議論ができるようにSNS 上でのグループを作ることが望ましいといえる。

それぞれの具体的な運営方針のデザインと、それに伴う学習の評価に関しては次年度の課題とする。

(文責：池尻)

4-1 SGH アソシエイトとしての取り組み

本校は2014年度に、「アジアの中の日本」と銘を打ち、スーパーグローバルハイスクールアソシエイト (SGH-A) に任命された。今年度は、その試みの一つとして、放課後にアジアの言語講座 (現在はタイ語、韓国語) をインカフェで開講した。

4-1-1 タイ語講座

本校は、1975年以来40年間、タイ王国政府派遣留学生を受け入れており、タイ国とは特に強いつながりを持っている。しかしながら、本校の生徒も教員もこれまでタイ語を学ぶ機会がなく、タイ国から来客があった際や、留学生に対しても常に日本語か英語でコミュニケーションをとってきた。そんな本校のタイ語講座開講に後押ししたのは、プリンセスチュラポーン校と科学教育振興を目的として、5年間の交流協定を結んだことであった。2012年度より、毎年両校を訪問し合い、科学の発表会を行っている。チュラポーン校の生徒さんや先生方がタイから本校に来た際、日本語で挨拶してくれたのを見て、本校の生徒も教員も、タイを訪問する際またタイからお客様を受け入れる際、せめて挨拶くらいタイ語でできるようにしたいと思い始めた。そのような経緯から、アジアの言語の一つとしてタイ語が選ばれ、講座が開設されることになった。幸いなことに、本校の卒業生で、現在東京外国語大学の博士課程でタイ語を専攻している

方に講師をお願いすることができた。昨年度は、タイ訪問予定の生徒中心にSSH企画として試験的に行ったが、今年度は、SGH-Aの企画として本格的に開講した。

昨年度、プリンセスチュラポーン校を訪れる前に、少しでもタイ語に触れる機会をとということで、講座の日程を決め、全4回ほど放課後に行ったが、スケジュールリングが遅くなり、全校に周知するのも遅れたため、参加者があまり集まらなかった。本校の生徒は、レポート、発表準備、部活、行事と、放課後は毎日非常に忙しくしている。そこで、インカフェスタッフで話し合い、今年度の講座開講にあたり、早く日程と内容を決め、全校に周知し、あらかじめ予定を組みやすいようにした方がいいということになった。1学期の終わりに、講師を招き、今年度の講座形態及び内容を話し合った。言語は、1回きりの長時間の講座よりも、1回あたりの時間が短くても繰り返し学んだ方が身に付くとの講師の方からの言語学的知見と、複数回に分けて開講することで、より多数の生徒が講座に参加できるようにしたいというインカフェスタッフの思いから、今年度は、複数回の講座にすること、また特定の曜日に固めると、部活で参加できない生徒も出てきてしまうため、講座を2展開することに決まった。内容面としては、発音を一通りおさえ、簡単な挨拶が出来るようになるという目標をたて、1回80分×6回で完結の入門タイ語講座を2コース置く(講座計12回)ことになった。日程と内容は表3の通りである。なお、毎回、発音練習と前時の復習を行っている。上

表3 2015年度 タイ語講座 日程と内容

	火曜日コース	水・木曜日コース	内容
第1回目	9月15日(火)	9月10日(木)	タイとはどのような国か、また「言語を学ぶ」とはどういうことかについてワークショップ、音節の仕組み、発音、声調
第2回目	10月6日(火)	9月16日(水)	語尾、基本語順(肯定文)、自己紹介の練習
第3回目	10月27日(火)	9月24日(木)	基本語順(否定文、疑問文)、数詞、会話練習
第4回目	11月17日(火)	10月8日(木)	修飾表現、BE動詞、会話練習
第5回目	11月24日(火)	11月12日(木)	こそあど、存在を表す表現、タイ文字
第6回目	12月1日(火)	11月25日(水)	「～したい」、可能・許可、確認の表現

記のようなシラバスはあるものの、講座の途中の回からでも参加できるよう、講師の方には柔軟に対応していただくことになった。時間は、いずれも授業終了20分後から開始し、火曜日は16:20～17:40、水曜日は15:20～16:40、木曜日は16:00～17:20である。

講座開講にあたり、インカフェスタッフがチラシを作り、2学期1週目に全クラスに配布した。そのチラシのリード文は図13にあげている。

昨年度より、より多くの生徒にタイ語を知ってもらいたいという経緯から始まったが、結果として、6回全ての講座に参加したのは、1年生の生徒1名だけであった。回数を増やしたことで、20名ほどの生徒が1度は講座に参加したことになるが、前回とはあまり変わらなかった。よって講座は少人数の中、講師のお人柄もあり、アットホームな雰囲気のもと、終始楽しく進められた。現在、本校第1学年にタイ国政府派遣留学生が1名いるが、彼

タイ語・韓国語講座のご案内

みなさんこんにちは！ In-Café イベントスタッフから、今年度のタイ語、韓国語の各講座のご案内をします。タイ、韓国はどちらも、学習旅行や SSH のイベントでの交流が深い国々です。ことばを知ることで相手の国の文化を学び、交流イベントをより楽しめるものができるよう、ぜひ参加してください！

○タイ語講座

タイ語講座では、昨年度もお越しくださった 49 期卒業生の福富さんを講師にお招きし、タイ語を学んでいきます。今年度は一年を通じた全 6 回のプログラムで、タイ語での会話や、タイ語の文字を読めるようになる講座にする予定です。基本的には全ての回に参加して欲しいですが、各講座のみの参加でも楽しめるような内容になります。タイとの交流に興味がある人は、一度でも参加してみてください！

場所は無印の場合は In-Café です。2つの日程があり、同じ回の講座はどちらも同じ内容を扱います。

図 13 インカフェスタッフが作成し、全校に配布した語学講座のチラシの抜粋

も時々顔を出して、参加者に発音・会話のモデルを示してくれた。

参加者の中で特筆すべきは、6回全ての講座に参加した、前掲の1年生である。タイ国国費留学生と同じ部活に所属しているが、そのタイ国生ともっと仲良くなりたい、そのためには彼の母語を勉強したい、という理由から参加を決めたとのことであった。内的動機付けが非常に高く、家で毎日復習を行っていたとのことである。その結果、たった6回の講座で、発音や簡単な挨拶の仕方はもちろんのこと、100語以上の単語をマスターし、自分で新規の文もどんどん作れるようになり、文字も書けるようになった。講座終了時点の感想は、「今回タイ語を教えてもらえる機会があり、良かった。本での独学では、ここまで身につけられなかったと思う。1回目の講座終了後から、覚えたタイ語でタイ国生に話しかけ、通じた時は何より嬉しかった。もっともっと話せるようになりたい。来年度も、語学講座としてタイ語上級コースを作ってもらえるとありがたい。もし講座開講が難しいとしても、今後も勉強し続けたい。とても面白い講座で、みんなどんどんとるべきである。」であった。

今年度のタイ語講座の成果としては、多からずも生徒の側からも種が蒔かれたこと（生徒が英語以外の言語を学ぶ必要性を感じたこと）、種を広く蒔き、より多くの生徒に花を育てる機会を提供したこと（開講回数を増やしたこと）、そして上記に挙げた1年生のように、他の生徒が蒔いた種から立派に花を育てた生徒が一人で

はあるが現れたこと（興味を持った生徒が、講座をうまく利用して自分の可能性を広げることができたこと）である。今後も、たとえ参加人数が少なくとも、生徒の方から「こんなことを学びたい」という知的好奇心あふれる声が上がると、それを同じく興味のある他の生徒とともに形にし、それぞれの血肉になるような、そんな活動場所を提供できれば良い。（文責：久野）

4-1-2 グローバルカフェ

本章では、今年度から In-café 内で発足したグローバルカフェについて紹介する。昨年度から本校は SGH アソシエイト校としての認定を受け、それに伴い韓国語とタイ語の外国語講座が始まったことは既に紹介した通りである。しかしやはり SSH 認定に伴い In-café が発足したという経緯もあって、開催されるイベントの多くが SSH 関連であり、特にグローバル人材の育成や国際交流という分野が弱いという問題点があった。その点を充実させるために2学期から新たに発足し、活動を開始したのがグローバルカフェである。

4-1-2-1 発足の背景と狙い

当初の狙いは、「気軽に始められる国際交流」をテーマに、生徒にとっては大事のように受け止められがちな国際交流・異文化交流の機会を、学校の中で提供することであった。ここで留意しなくてはならないのが、近年話題となる「グローバル人材」とはどのような人材であるかの

定義である。しばしば英語の資格試験の結果や海外経験が評価判断とみられがちだが、必ずしも語学能力だけがこの指標ではないと本校は考える。この点に関して国際基督教大学の学長を務める日比谷純子氏は「キーワードは『越境』であり、自分の常識にとらわれず、世界には多様な考えがあることを知ったうえで他者と共に生きていける人」と説明しており⁷⁾、本校のイメージもこれに近い。一方で日本のことをきちんと理解し、外に発信する力も疎かにはできない。本校SGHアソシエイトが目標として掲げるキー・コンピテンシーの一つである「アジアに軸足を置き、バランスよく世界を眺める力」にも通ずる、国際理解と日本理解の両方の力をバランスよく備えた人材育成を目指す。そのための一歩として、まずは校内から国際交流を始めようというのが本企画の出発点である。

4-1-2-2 高大接続による運営

SGHアソシエイトとしての活動も視野に入れ、本校ならではの強みや魅力を生かしながらこの新たな企画を運営する上で着目したのが、大学の附属高校としての立場である。大学という人的資源を有効に活用すべく、東京学芸大学で学ぶ留学生を本校に招き、定期的に本校生徒と交流する場を設けるという構想から本企画は始まった。東京学芸大学では2015年秋から留学生センターが中心となり、昼休みを活用した欧米やアジアの留学生との交流会や個人的な会話練習のパートナーを紹介する学芸カフェテリアランチ講座が開講された。意欲があっても日本人学生や学外の日本人コミュニティとの接点を持つていない留学生と外部をつなごうとするこれらの企画は、本校のグローバルカフェとも通ずる点が多く、今後は大学とも連携し企画を進めていきたい。

4-1-2-3 2015年度のイベント

①プレ企画「ドイツ人日本学研究者が語る日本」

開催：2015年9月28日（月）昼休み・放課後

会場：In-café

参加人数：各回とも約35名

グローバルカフェの初回は、東京学芸大学の提携校であるドイツ・ハンブルク大学の博士課程で日本学を学ぶ若手研究者に、「世界の大学で日本について学ぶとは？」というテーマで講演と質疑応答をして頂いた。講演自体は主に英語で、日本学という学問研究の話題から偏った思考による判断の危険性、真の国際理解とは何か、異文化を学ぶことの重要性、語学の重要性、自分の頭で思考することの重要性と、多岐にわたりお話くださり、生徒も表情

豊かに答えていたことが印象的だった。特にフリートークが盛り上がり、国の比較から若者の政治離れや現在の日本の政治状況、歴史教育など生徒も積極的に質問していた。英語で質問をしている生徒も数名おり、英語でのディスカッションを楽しんでいる様子もみられた。

ドイツ人 Japanologie
日本学研究者が
語る日本

～「サムライ」「ゲイシャ」の国はもう古い？！

9月28日(月) In-caféにて
昼: 12:30～13:00
放課後: 15:30～17:00
※昼は放課後のショート版です

「ヨーロッパの大学では日本のことどう扱ってるの？」
「日本学って何を学ぶの？」
「世界からみて今日本について一番ホットな話題って？」
「どうして日本学を専攻しようと思ったの？」

ドイツで日本学を学ぶ若手研究者が、
日本学のこと・ヨーロッパからみた日本のこと
実際に日本で暮らしてみての感想…
日本人よりも日本のことを知っている(?!)
外国人研究者ならではの視点でお話しします。

質問などは地蔵科(世界史)
小水までどうぞ。
グローバルカフェスタッフ、募集中!!

図14 講演会ポスター



図15 当日のフリートークの様子

②グローバルカフェ×外務省

開催：2015年10月16日（金）放課後

会場：In-café

参加人数：約10名

61期・62期を対象に行われた外務省主催の「高校講座」の後に、外務省職員の方を In-café にお呼びしてお話を伺う場を作れないか？と生徒から企画が持ち上がり、実現した。訪れた生徒たちは講演者を囲んで外務省での女性の働き方や、海外での経験についてなど、より具体的な質問を直接伺うことができたようである。参加した生徒からは「これまで講演会という、話を聞いて終わりだったし会場で大人数を前に質問するのは勇気があるけれど、こうやって In-café で直接お話を伺えるイベントはありがたい。」との声も聞かれた。学校や学年主催のイベントの補佐として In-café を活用するという今後のビジョンが得られたイベントとなった。

③グローバルカフェ×韓国編

開催：2015年11月4日（水）放課後

会場：In-café

参加人数：8名

大学から留学生を招き、交流イベントを行うという当初の企画として初めての試みであった。大学の国際課に全面的に協力して頂き、2名の韓国人留学生が来てくれた。今回は翌週に61期が学習旅行を控えていることもあり、特に釜山に行く生徒を対象に現地の様子や簡単な韓国語でのコミュニケーションなどを教えて頂いた。日本からお土産として持参したら喜ばれるものや切符の買い方など、ガイドブックからではなく直接韓国人留学生から教えてもらえ、学習旅行の学習テーマについて個別にアドバイスをもらう生徒もいた。留学生からも、日本の学校で行われる児童・生徒との国際交流のイベントの多くが国や文化の紹介に留まっているという現状を聞き、留学生の側にも実際に日本の児童・生徒と直接交流し議論する機会が欲しいというニーズがあることがわかった。



図 16 韓国人留学生との集合写真

④グローバルカフェ×タイ編

開催：2015年11月25日（水）放課後

会場：In-café

参加人数：11名

この企画も12月にタイを訪れる本校生徒から、タイの様子や気をつけたいマナーなどについて本校を卒業したタイ人留学生から教えてもらう場を作れないか、と企画が持ち上がり実現した。59期で現在都内の大学に通う卒業に来てもらい、主にタイに渡航する生徒を対象に行った。

4-1-2-4 今後の展望と課題

立ち上げたばかりということもあり、教員が主体となって運営する企画が多かったが、後半は生徒発案の企画が多くなった点は評価できよう。これらの企画では、In-café 本来の生徒・教員がやりたいことを実現する場としての機能がうまく果たされていた。一方で初回以降参加者が減少し、In-café が常に抱える課題であるが参加生徒が常に固定してしまったことが挙げられる。要因としては宣伝活動の不十分さや設定日時の問題もあるが、やはり個々のイベントに生徒自身が参加したいと思えるような魅力が欠けていたことは否めないだろう。次年度からは生徒のニーズを見極め、学校教育の主体である生徒が足を運びたい企画を、スタッフ生徒を中心に模索していきたい。また今年度の企画は、留学生や講演者が日本語を話すことが前提となっており、せっかく各言語のネイティブスピーカーをお招きしているのに日本語での企画ばかりとなってしまった。生徒から希望も出ている日本語を禁止した英会話空間を In-café 内で実施する English Café（仮称）など、留学生の力を借り、語学力向上の場を提供できるような企画も今後作っていききたい。また初回の企画後に行ったアンケートでは、新しい試みに対し肯定的な意見もあるなかで「外国人を呼んで、何がしたいのかがみえない。外国人と交流すればそれでよいのか」という鋭い意見もみられた。冒頭で述べたような本企画の趣旨と狙いを今一度見つめ直し、共有・発信していく必要がある。

まだ校内での認知度も低いですが、大学や外部との連携を強め、始まったばかりのグローバルカフェを盛り上げていきたい。
(文責：小太刀)

5 総合的なコンピテンシーの評価

今年度の評価は、In-café に対する評価としてこれまで扱えていなかった3つの観点から行った。具体的に

は、「外部講師による講座聴講の効果」, 「In-café スタッフの社会的ネットワークとその効果」, 「長期的にみたIn-café スタッフの成長」について, In-café の活動を深くサポート頂いている池尻氏がスタッフにインタビューするという形で, それぞれ調査を頂いた。また, このようにたくさんのイベントの行われているIn-café の活動に関わっているスタッフに, グローバル・リーダーとして必要となる問題解決力, 解決策立案力, 資料収集力, 分析力, 提案力が, 活動を通してどのように変容したか, 6段階(1:低下した, 2:やや低下した, 3:変化なし, 4:やや向上した, 5:向上した, 6:大変向上した)で自己評価してもらった(表4 インカフェスタッフの変容, 回答者数9名)。

表4 インカフェスタッフの変容

A. 問題解決力	平均
a. 関心のある事柄について, その問題の本質を発見したり, 原因を説明することができる。	4.3
b. その問題がどのくらい重要であるかを考えることができる。	4.6
c. 問題の重要度の根拠を見つけることができる。	4.7
B. 解決策立案力	
a. なぜ, そのような問題が生じているか, いろいろな側面から考えることができる。	4.3
b. 生じている問題について, 知識や経験を通して説明できる。	4.1
c. 問題に影響を与えている原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し, まとめることができる。	4.6
d. 問題の原因を挙げ, 重要度をまとめることができる。	4.1
e. 問題解決に向けて仮説を立てることができる。	4.1
C. 資料(文献・データなど, 客観的に判断するための資料)の収集力	
a. 仮説を確かめるため, 資料を収集することができる。	3.6
b. 問題解決にあった資料を選択できる。	3.6
c. 集めた資料の正確さが分かる。	3.4
D. 分析力	
a. 集めた資料を集計して, 図や表にまとめることができる。	3.6
b. 作成した図表について, 必要に合わせた使い方ができる。	3.7
c. 分析した結果から, 重要な結論を導き出すことができる。	3.9
E. 提案力	
a. 作成した図表や分析結果を用いて, 有効な問題解決策を提案できる。 (外国語で行なわれたプログラムだった場合は, 外国語で提案できる)	3.6
b. 提案を適切にプレゼンテーションできる。 (外国語で行なわれたプログラムだった場合は, 外国語でプレゼンテーションできる)。	3.4
c. 提案した内容がどこまで有効かについて説明できる。 (外国語で行なわれたプログラムだった場合は, 外国語で説明できる)。	3.4
d. 自分の発表に対する質問に適切に回答できる。(外国語で行なわれたプログラムだった場合は, 外国語で回答できる)。	3.7

その結果, いずれの項目においても, 「3:変化なし」を越える自己評価が得られた。特に問題解決力と解決策立案力については評価が高く, 「6:大変向上した」をつける生徒もいた。一方資料の収集力や分析力は1ポイント近く低かった。これはIn-café の活動が, 資料収集や分析といった活動をあまり伴っていないことと関わるように思うが, イベントの立案, 評価など自主的に分析することも必要なため, 振り返りの方法としての定着をめざしたい。なお, 提案力については, 大きな変容を期待したが, 問題解決力や解決策立案力ほどの差異は見られなかった。この結果は, 選択肢に「外国語で行なわれたプログラムだった場合は, 外国語で提案できる」が含まれていたため, ハードルが上がってしまったものと考え

られる。提案力については, 英語での対応を切り離れた2つの項目で再調査が必要であろう。

なかなか評価の難しい取り組みではあるが, 関わった生徒の学びは計り知れない。また, イベントに参加する生徒を集めることは, 多くの生徒と話題を共有することになる。本校の生徒全体についての変容の調査はまだ行っていないが, インカフェスタッフと同様な調査を実施し, 差異を分析したい。

さらに, 活動の狙いである, In-café スタッフの①生徒たちが自由な学び場を作ることができる。②生徒のやりたいことを実現することができる。③生徒や教員, 専門家が自由に議論できる空間をつくることできる。④In-café の活動を生徒や教員にPR することができる。⑤自ら課題を見つけ, それを解決できる。および, 本校一般生徒の①イベントに自主的に参加することができる。②イベントでの学びを記録することができる。③イベントでの学びから新たな課題を発見できる。④課題を解決するための行動を起こすことができる。⑤自分の考えを様々な方法で発信することができる。についても調査を進める予定である。(文責 宮城)

6 まとめ

In-café の目的である活動のきっかけとなる種を蒔くことは, 外部講師の講座がその一翼を担っている。

また, 活動の幅を広げる人的なネットワークの醸成は, In-café スタッフの企画・運営を通して形成されたモデル型ネットワークや共同型ネットワークが該当すると考えられる。

さらに, 企画後もSNSなどを通して普段の考えや悩みを共有することで, 社会関係資本を獲得すると同時にネットワークが維持される事例も見られた。

In-café スタッフの成長を長期的に分析した場合, 自身の学びを応用させる機会を設けたり, 企画を実行しなければいけない状況を作ったりすることが, その成長に重要である可能性も示された。

In-café スタッフの先輩と後輩の共同型ネットワークの構築については, 先輩と後輩のペアで運営を進めさせることが効果的といえる。興味・関心のあう先輩と後輩がペアになって企画を進めることによって, 言語化しにくいIn-café に対する捉え方や文化観も伝えられ, 同時に後輩も企画を実行するという経験を積むことができる。

このように, In-café スタッフの組織構成に対しては, はじめに各自の興味・関心を正確に把握し, 一定期間内

に企画を行わなければならないという制約を設けた上で、興味・関心の近い先輩と後輩をペアにさせ、引き継ぎを行いながら企画を実行させる経験を積めるような運営デザインの有効性が見えてきた。

次に In-café における SGH の活動は、まだ立ち上げたばかりということもあり、教員が主体となって運営する企画が多かった。後半は生徒発案の企画が多くなった点は評価できる。また、これらの企画では、In-café 本来の生徒・教員がやりたいことを実現する場としての機能がうまく果たされていた。

一方で、In-café の企画全般に見られる初回以降の参加者が減少や、参加生徒が固定してしまったことの要因としては、宣伝活動の不十分さや設定日時の問題もあるが、やはり個々のイベントに、生徒が参加したいと思えるような魅力が欠けていたことは否めない。生徒のニーズを見極め、生徒が足を運びたくするような企画を、模索していきたい。各言語のネイティブスピーカーをお招きし、日本語を禁止した英会話空間をつくる English Café (仮称) など、留学生の力を借り、語学力向上の場を提供できるような企画も良いだろう。なお、新しい試みに対し肯定的な意見もある中で「外国人を呼んで、何がしたいのかが見えない。外国人と交流すればそれで良いのか」という鋭い意見も見られた。企画の趣旨と狙いを今一度見つめ直し、共有・発信していく必要がある。

ところで、In-café の4年間の取り組みは、自由度が大きく試行錯誤の連続であった。その中で、生徒も教員も多くのことを学んだ。全く何もなかった1年目は、イベントを企画するだけで多くの生徒が関心を示した。ビックネームのゲストが来ると生徒がたくさん集まるのは今も変わっていない。一方で、宣伝の仕方などは、色々な変遷があるが、「関心を持った生徒の口コミの広がり」に勝るものはない。スタッフの生徒が常に In-café に屯すような習慣がないと、「生徒のやりたい」も出てこない。会話の中から、「面白そうだからやってみよう」が飛び出せばしめたものだ。

今年度は、SSH 活動で育成したい能力を、In-café の活動を通して獲得できたか、スタッフに自己評価してもらった。その結果、いずれの項目においても、「3: 変化なし」を越える自己評価が得られたことは喜ばしい。特に問題解決力と解決策立案力については評価が高く、「6: 大変向上した」をつける生徒もいた。まさしく In-café を運営するという事は、日々問題解決と解決策立案のオンパレードである。一方資料の収集力や分析力は、平均がやや低かった。これは、問題解決の PDCA サイ

クルがうまく回っていない表れかもしれない。イベントの立案、評価などを自主的に分析することも重要なので、振り返りの方法としての定着を目指したい。なお、提案力についても、大きな変容を期待したい。

In-café は自由度が高く、評価の難しい取り組みではあるが、関わった生徒の学びは計り知れない。また、イベントに参加する生徒を集めることは、多くの生徒と話題を共有することになる。In-café スタッフが、「①生徒たちが自由な学び場を作ることができる。②生徒のやりたいことを実現することができる。③生徒や教員、専門家が自由に議論できる空間をつくることができる。④ In-café の活動を生徒や教員に PR することができる。⑤自ら課題を見つけ、それを解決できる。」が目標であることを認識して運営を行い、一般生徒の「①イベントに自主的に参加することができる。②イベントでの学びを記録することができる。③イベントでの学びから新たな課題を発見できる。④課題を解決するための行動を起こすことができる。⑤自分の考えを様々な方法で発信することができる。」などの行動の変容に結びつけたい。

(文責 宮城)

7 参考文献

- 1) 宮城政昭, 齋藤洋輔, 池尻良平, 原田和雄 (2013) Intelligent Café の運営とコーディネーション能力の育成 東京学芸大学附属高等学校紀要, 50, 97-118.
- 2) SULE 委員会 (2014) / (2015) Intelligent Café における新しい学びの取り組み / (2) 東京学芸大学附属高等学校紀要, 51, 111-134/52, 115-132
- 3) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryo/06092005/002/001.htm
- 4) 加納隆徳, 齋藤洋輔 (2015) リスク社会と防災 (2) ~生徒の行動を促すカリキュラム開発~, 東京学芸大学附属高等学校紀要, 52, 53-68
- 5) Wenger, E. (1998) *Communities of practice Learning, meaning, and identity*. The Press Syndicate of the University of Cambri
- 6) Lin., N. (2001) *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*. Cambridge University Press. (筒井淳也, 石田光規, 桜井政成, 三輪哲, 土岐智賀子 訳 (2008) ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論. ミネルヴァ書房.)
- 7) 「新テスト」段階的实施も, 毎日新聞 (朝刊), 2015.11.23 (月) 13 面